

【2017/1/19 経済学部ワークショップの様様】

《ワークショップ ReD》

女性漫画家が描く戦争

今日マチ子とこの史代を中心に

滋賀大学経済学部准教授 藤岡俊博



デパートの地下で、たくさんのスイーツがならぶショーケースのまえに立つ気分——報告者の藤岡俊博さんや出席者が持ってきた「漫画」がたくさんならぶワークショップ。わくわくする。報告で彼はいくども「漫画」研究の専門家ではないと控えめなようすをみせつつも、バッグいっぱいになる「漫画」本を1冊ずつ回覧しながら、ていねいにそれらを見せ、説き、解釈してゆく。彼の本業は「哲学」や「ヨーロッパ思想史」ということなのだろうが、その片手間や余業としてではなく、きっと、ほんとうに、「漫画」が好きなんだろうとおもわせる口調と手つきが好ましかった。

すでに『ユリイカ』で、市川春子、今日マチ子、この史代の作品を論じている藤岡さんと議論がしたくて、このワークショップを組んだ。「今日マチ子とこの史代を中心に」となっていた論題の副題のとおり、ふたりの作品を中心にしながら、さらに、いくにんもの「女性漫画家が描く戦争」(論題)の配置をスケッチした構図はみごとだった。

論点をふたつ、いただいた。ひとつは劃ということ。おうおうにしてわたしたちは、戦前、戦時、戦後という区切りを設けて歴史を見たり、知ったり、考えたりしようとする。その区割りは絶対か？ということ。彼は、こうの『この世界の片隅に』(2007-2009年)によりながら、「シームレス」の形容をもちいて戦時と戦後のつながりを説いた。それは、戦争を生き残ったものたちとわたし(たち)との邂逅や接触をとおして、戦争への向きあいかたやとらえ方を記録することにつながってゆく。そのとき戦後は、ただの戦争のあとを指す時間の謂ではなく、思想や精神をかたちづくる橋頭堡となってゆく。

このことはもうひとつの論点である想へつながる。想とは、こころにももの姿を写す、見る、ということ。現実とファンタジーとの対比や対照、想像力による現実への抵抗を、藤岡さんは今日マチ子の作品に読んだ。「少女にとって甘いものやかわいらしいもの」に籠る力、「じぶんたちの甘やかな想像力」が「残酷な現実や、大きすぎる敵に対して戦う方法」となるかもしれない潜勢力、それらはまた「いびつな甘さ」(今日マチ子)でもある。

ヴィジュアルな技法がかつて戦争を支えたこともあった。「漫画」がいま、わたし(たち)の内奥にある戦争を扶ろうとしている。(阿部安成)